講義

結核患者ト其體重

於傳染病研究所　宮川米次

結核!!肺結核!!何ンタル忌シキ言葉デアロウ、老幼貴賤ノ別ナク須臾ノ間モ脅威ヲ逞シウシツ、アルモノハ此ノ結核デアル、平和ノ戰爭ト言フハ戰後ニ於ケル經濟戰ヲノミ指スモノデハナイ吾人人生ハ覺メタル間、眠レル裡ニモ、不知不識ノ間ニ身命ヲ賭シテ戰ヒツ、アルノハ此ノ結核防禦戰デアルノダ、又結核菌位、「コスモポリタン」ナ黴菌ハ他ニ一寸類ヲ見ナイデアロウ、其レハ特ニ人類別ケテモ其組織臓器ニ對スル親和力、換言スレバ侵襲力ヲ指シテ言フノデアル、肺臓組織ハ彼等ガ最モ好ンデ侵カス所デアルガ、其他何種ノ組織ト雖モ之レニ抵抗シ得ルモノハナイ、骨デモ尚且ツ極メテ脆ク敗北スルノデアル、吾等内科的疾患ノ診療ニ從來スルモノ、門戸ヲ叩ク病者ノ殆ンド半數ハ結核性何々疾患デアルノダ、ピルケー氏皮膚反應所見ヲ信ナリトシ、加フルニ多數剖檢所見ニ徵スルモ如何ニ多數ノ人士ガ(殆ンド總テノ人ガ)一度ハ結核菌ニ侵カサレ居ルヲ示シテ居ルノデアル、思フテ茲ニ至ル時ハ此結核ナルモノハ實ニ人生ノ最大脅威者ト見做スルコトガ出來ヤウ、住フニ所ナク、食フニ物ナカリセバ、果シテ其等ノ國民ニ國家、若シクハ正義人道ノ觀ヲ有セシメ得ベキ餘裕ガアルデアロウカ、況ンヤ、生命ノ根源ニ觸ル、貧苦、此貧苦ニ惱メル細民ニ特ニ多クノ結核病者ヲ見ル、誠ニ彼等ガ世ヲ呪ヒ富者ヲ嫉ムモ亦無理ナラヌ事柄デハナカロウカ。

翻ツテ吾等ノ周邊ヲ見ルニ一トシテ吾人ニ結核菌ヲ提供スルニ都合善ク出來テ居ナイモノハナイノデアル特ニ唯一ノ交通機關タル東京市ノ電車ノ如キ其最タルモノデアル、雨ノ日、雪ノ朝、往來ハ忽チ化シテ泥田トナリ乾ケバ、忽チ紅塵萬

丈ノ巷トナル、此ノ上ヲ右ニ左ニト走リ廻ル電車彼ノ内ニハすし詰ニサレタル乘客ガ仁儀道德モアラバコソ、口ヨリ鼻ヨリ結核菌ヲ吹キ出シツヽ無病者ヲ襲ヘ〳〵ト脅威ス、年々此ノ電車内ニテ感染スル傳染病ハ獨リ結核ノミト言ハズ極メテ多大ナルハ喋々スル迄モナキコトデアル因ツテ來ル犧牲ノ如何ニ大ナルカヲ思フト誠ニ是レ人道上ノ一大問題デアリ、春秋ノ筆法ヲ用フレバ電車ハ東京市民ヲ殺スト言フヲ得ベケン乎、斯ク思ヒ來ルト獨リ自衞ノ上ヨリスルモ暫クノ間モ捨テ置キ難キ一大問題デアル、言フ勿レ當局ニ其人ナシト、由來國家ノ政治ニハ賢明ナル少數ノ爲政家アランヨリモ善ク理解セル民衆ノアランコトコソ實ニ重要ナル要素ナレ、知ラズヤ古ノ專政君主國ハ今ハ其跡ヲ斷テ、共和政體ナラズンバ卽立憲君主國デアリ、國家ノ政治ハ民衆ノ聲ニヨリテ行ハレントスルヲ、吾等ガ當時ノ脅威者タル結核ノ豫防撲滅ノ如キ、誠ニ是レ民衆ノ聲ニヨリテ速カニ起ラザルベカラザル問題デアル豈夫レ獨リ爲政者ノ腕ニノミ俟ツベキモノデハナイノデアル、換言スレバ、結核ノ何物ナルヤヲ徹底的ニ醫家ハ勿論廣ク深ク民衆ニ理解セシムルハ現代ノ急務デアル、余ハ此意味ニ於テ本誌ガ茲ニ呱々ノ聲ヲ擧ゲ、大ニ社會ニ獅々吼シテ結核ノ豫防治療撲滅ニ乃至ハ新研究ニ將ニ木鐸タラントスル壯擧ハ機宜ニ適シタルモノニシテ切ニ後來ノ發展ヲ希望シテ止マナイ次第デアル以下聊カ、平素感ズル所アル結核病者ノ體重竝ニ其治療效果トヲ比較對照シ先人ノ記錄ヲ參酌シテ讀者ノ參考ニ供セント欲ス、

結核、特ニ肺結核ノ初期ハ貧血、削瘦、及ビ微熱(特ニ午後)ノ如キ症狀ハ卽肺門ノ結核若シクハ肺尖加答兒ニ罹レルモハニ常ニ見ラル、所デアル、特ニ此ノ瘦セル肥ユルト言フ問題ハ自覺的ヲモ亦他覺的ニモ、屢〻重要ナル一個ノ治療效果ノ標準ニ利用スルコト決シテ稀レデナイノデアル、亦適當ナル治療特ニ榮養療法等ヲ檢シ、體重ガ次第ニ增加シ行クガ如キ患者ハ心身爽快ヲ覺エ、胸部ノ處見モ亦漸次ニ消退シ延ヒテハ微熱モ失ハレテ終ニ常溫ニ復ス斯カル場合患者ハ通常元氣善ク食慾モ亦亢進シ、體重モ一層增加スルニ至リ嘗テ手ニ合ハザリシガ如キ神經質屋モ嬉々トシテ醫者感謝ノ意ヲ表スルニ至ルモノデアル、此意味ニ於テ健康ナル消化器ヲ有スル患者ニ適當ナル食品ノ案配ヲ爲ス時ハ食氣ハ進ミ榮養增進、體重增加シ來ルモノデアリ又斯ノ如キ轉機ヲ取ル患者ハ卽チ治癒シ易キ部類ニ屬スト稱シテ可ナリ、亦實際上初期ノ肺尖加答兒患者ガ適當ナル治療ニヨリテ體重增加シ來ルモノハ其豫後ハ多クハ良好デアルノデアル、デットワ

イラー Dettweiler ノ言ヒヨルヒ „Wie das Verdauungsorgan einen der besten Schutzapparate gegen das Erkranken der Lunge darstellt, so ist es auch der beste Hilfsapparat der erkrankten Lunge" ト言フテ居ルガ蓋シ至言ナリト信ズル、即チ胃腸管ガ健康ナリセバ、榮養ヲ增進セシメルコトガ出來從ツテ其體內ニ免疫、防禦體ノ構成モ亦充分ニ出來從ツテ其ノ生ジタル物質ハ或ハ防禦トシテ働キ或ハ又治癒ヲ助成スル作用アルノデアル換言スレバ適當ナル榮養ハ之レニヨリテ細胞ノ生活力ヲ向上セシメ以テ其治癒的機能ヲ補助スルモノデアル、故ニ吾人ハ結核ノ治療法ノ如ク實ニ千差萬別ニシテ加フルニ何等特種的有效ナル治療法ナキ今日、最モ重要ナル一個ノ治療方法ハ即チ患者ノ榮養ヲ顧慮スルコトデアルト信ズル、適當ナル榮養療法ニ能ク耐ヘ得タリトセンカ、必ズ、體重ハ增量シ、其他總テノ自、他覺的症狀モ輕快シ行クヲ常トスルノデ、ブレーメル Brehmer 及デットワイラー等ガ榮養療法ハ結核治療ノ根柢ヲナスモノデアルトシテ重要視スルモ亦謂ナキニアラズト信ズルモノデアル、故ニ結核患者ヲ治療スル際ニハ入院セルモノト外來患者トニ論ナク患者ノ事情サヘ許シ得ラレナバ一週一回ノ體重測定ハ必要事項デアルノダ。コレヲ參考トシテ吾人ハ種々榮養ニ手加減ヲ爲スベキデアル。

吾人ハ上記ニヨリテ結核ト言フモノト榮養ノ良否トガ如何ニ密接ナル關係ヲ有スルモノナリヤヲ述ベテ見タ積リデアル、然ラバ結核患者ノ治療中、體重ガ增加スレバ、換言スレバ榮養ノ向上トイフコトハ每常病機ノ消退ヲ意味スルカ、又一面ニハ榮養ノ佳良ナルモノハ結核菌ノ侵襲ヲ蒙ラザルモノナリヤトノ二點ハ極メテ重要ナル點デアル、以下聊カ之ニ關シテ卑見ヲ述ベ、榮養ノ增進モ適度ニ留ムベキモノニシテ決シテ過重ノ榮養食品攝取ハ却ツテ有害ナルコトヲ示サウト思フ。

カルノオ Carot ガ記載セル一患者ノ實驗ハ如何ニ榮養ヲ增進セシムルモ、過重ナル時ハ結核ノ進行ヲ停止セシムルコトガ不可能デアルコトヲ善ク示シ居ルト思ハルヽノデアル、二十八年ノ一青年ガ、肺結核ニ罹リ喀血等ニ苦シミタルモノガ、過食療法ヲ施シ著ルシキ體重ノ增加ヲ來セリ即チ每食事ハ家族的常食ノ外ニ一乃至三食匙ノ肉粉十個ノ鷄卵一「リツトル」牛乳及ビ「ビール」ヲ用ヒ其最初ノ體重ハ五七瓩ナリシガ第一年七七瓩トナリ次デ九五瓩トナリ第三年ニハ實ニ

一〇四瓩ニ達セリ、之レニ拘ラズ、肺部ノ病竈ハ次第〳〵ニ廣リテ終ニハ左肺全部ニ及ンダト記載シ居ルノデアル、是レト類似ノ所見ハ他ニモ多ク見ラル、モノニシテ、卽チ、榮養狀態ヲ向上セシメ增進セシムルトモ、終ニハ病機ノ進行ヲ停止セシメ得ナカツタノデアル、米國ノブラウン Brown モ有名ナルサラナス、レーキ湖畔 (Saranace Lake N. Y.) ニアル、療養所ニ於テ十年間ノ治療實驗ヲ發表シ過重ノ體重增加ハ却ツテ肺結核治療機轉ニ對シテ不良ナリトノ結論ヲ下シ居ルノデアル、之レト感ヲ同ジウシ居ル學者經驗家ハ非常ニ多イ、ベルンハイム Bernheim 及バンデリール、レブケ等卽チ然リデアル、榮養ヲ增進スルノ可ナルハ勿論ナレドモ、是決シテ過重ナラシメヨトイフニアラズ又肥胖症ヲ作レトノ意味デハナイノデアル榮養狀態ノ增進ハ百發百中疾病ノ進行ヲ停止セシメ得ルカト言フニ勿論然ルニアラズ假令適度ニ榮養狀態恢復シ來ルトモ屢〻疾病ノ進行ヲ停止シ得ザルコトアルハ珍ラシクナイノデアル、要ハ過重ノ食餌ニヨリテ患者ヲ肥胖症トナスハ却ツテ危險デアルト言フコトヲ述ベタイノデアル、一程度ニ胸部ニ變化アルモノハ此變化ノミニテモ既ニ呼吸困難心氣亢進ヲ來タスノニ加フルニ肥胖症ニヨリテ一層之レヲ强カラシメ、時ニハ之ガ爲メニ喀血ヲ誘引スルコトナシトセズ、加フルニ肺結核ニ侵カサル、時ハ肺臟以外ノ實質性諸臟器ニ諸種ノ病變ヲ將來スルモノデアル、其ハ結核菌毒素ニヨルコト多ク、一面ニハ又第二次性ニ結核病竈ヲ惹起スルコトモ稀レデハナイノデアル、肝臟、腎臟、脾臟等ニ脂肪變性「アミロイド」變性ノ如キハ殆ンド常ニ見ラル、所ニシテ、消化管、淋巴組織ノ如キハ第二次性結核病竈ノ好發部位デアルノデアル、是等ニ隨伴シテ屢〻血行障碍モ現ハレ來ルヲ以テ强力ナル「マトスクール」ニ因ツテ來ル過重ノ榮養狀態ハ屢〻其個人ノ抵抗ヲ弱カラシメ、延ヒテ疾病ノ進行ヲ停止セシムルハ愚カ、却ツテ進行增惡ヲ將來スルニ至ルノデアル。

クラレ Klare シュレーデル Schroeder 等ノ如ク戰前ニハ可ナリ强制的ニ「マストクール」ヲ行ヒ、結核病者ノ體重增加ヲ勸メタル人々モ、歐洲大戰中必然的食品ノ缺乏制限ニヨリテ療養所ニ於テモ亦食品ニ大制限ヲ施サヾルベカラザルニ至ツタ、之レニ因ツテ、患者ノ體重增加率ハ戰前ノ夫レニ比スレバ、僅カニ五〇%ノ割合ニ過ギザリシガ尙且ツ其治療效ニ至リテハ何等遜色ナキノミナラズ、却ツテ一般ニ良好ナルヲ經驗セリ今日ニ於テハ過重强力ノ食餌攝取ハ却ツテ治

癒機轉ニ對シテ有害ナリトノ見解ヲ發表スルニ至ツタノデアル、イヒョック Ichok ノ實驗ハ亦之レヲ裏書シ居ルモノト信ズルヲ以テ同氏ノ實驗ヲ聊カ茲ニ記載シテ見ヨウ、同氏ノ療養所ニ於テ八十一例ノ胃腸管ニ何等合併症ヲ有セザル患者ニ就キ仔細ナル觀察ヲナセリ、其治療日數ハ十六ケ月ニシテ其初メ何レモ胸部ニ一程度ノ處見ヲ呈セルモノニシテ、治療ノ初期ニ於テハ安靜及ビ「マストクール」等諸種ノ方法ヲ施シ其所見ノ消失ト共ニ徐々ニ仕事ヲ始メシメ、其時間ヲ延長シ終ニハ一日ニ八時間位ノ肉體的勞働ニ從事セシメ、何等惡影響ヲ胸部ニ及ボサヾルモノヲ選ミテ其體重ノ變化ヲ觀察セリ、入院時ト退院時トヲ比較スルニ何等ノ增減ヲ見ザルモノ十九例、增加セルモノ(平均二・五瓩)二十二例而シテ退院時ニ却ツテ減少ヲ示セルモノ(平均二・五瓩)四十例ニシテ、體重ノ最大增加ノ時期ニ於テハ六十五例ニ於テ增加ヲ見、平均三・二瓩ナリキ、此際ニ於テモ尙且ツ十六例ハ殆ンド何等ノ變化ヲ見ザリキ、一旦增加セル體重ガ身體ノ運動若シクハ輕度ノ勞働ニ伴ヒテ減少ヲ來スハ卽、過剩ノ脂肪ハ次第ニ燃燒消耗スルガ爲メデアル、而シテ體重ノ減少ガ必ズシモ病症ノ增惡ヲ示スモノデモナイコトハ上記ニヨリテモ明瞭デアル、故ニイヒ゛フノ言ノ如ク體重ノ增減ヲ以テ直チニ疾患ノ輕快、增惡ノ標尺(メヤス)トナルモノデナイト戒メオルノハ至言ナリト信ズル卽 Eine Täuschung ist es aber, das Zunehmen an und für sich als therapeutischen Erfolg anfzufassen oder die Grösse der Gewichtszunahme als Gradmesser der Besserung aufzunchmen.

上記ニヨルト榮養療法ニヨリテ體重ノ增加ヲ計ルコトハ一寸考ヘ物ノ樣ニ聞ヘルガ之レハ決シテサウ言フ意味デハナイノデアル、結核患者ハ上述ノ如ク實ニ體重ノ減少ヲ來タシ羸瘦シ來ルコトガ其初期及ビ末期ヲ通ジテ極メテ顯著ナル症狀デアルノデ、之ハ體蛋白質ハ結核菌及ビ其毒素ニヨリテ强度ニ破壞分解セラレ、重症患者ニ於テハ「デアツオ」反應若シクハ「アルデヒード」反應等ガ尿中ニ失ハレ、多量ノ喀痰及ビ不快ナル然カモ、强烈ナル發汗等ニヨリテ體蛋白質ガ分解消失セラレ、延ヒテ脂肪組織モ消耗セラル、コトハ今更申ス迄モナク茲ニ削瘦ナル症狀ガ顯著トナルノデ吾人ハ一程度ニ食品ノ榮養價ヲ上昇セシメ其分解消失ヲ補充セント努ムベキハ勿論デアル、ホーチマン及トーマス等ノ實驗ニヨルニ「カロリー」高キ食品ヲ過度ニ使用シ行クコトハ亦結核菌ノ侵襲ニ對シテ防禦ノ力アリト稱シ多數ノ贊成者アル次第

デ又日常吾人モ臨牀的ニ經驗シ居ル所デアル、要ハ適度ノ食餌療法ニヨリテ其體重ノ增加モ須ラク適度タラシメヨトノ謂デアルノダ、然ラバ此ノ適度ノ食餌療法ハ如何ニスベキヤトノ問題ハ卽チ結核榮養療法ニ於ケル主要ナル點デアッテ茲ニハ其處ニ立チ入ルヲ避ケ以下聊カ、體重特ニ健康者ノ體重ハ何程ヲ以テ正常ト看做スベキカニ就テ卑見ヲ述べ之レヲ結核病者ノ體重ノ「コントロール」ニ應用シ見ンコトヲ提唱ショウト思フ。

總テ人體ノ榮養狀態ヲ論議スルニ當リテ何程ノ體重ヲ有スルガ、正常ナリヤヲ定メル標準ヲ作ルコトガ非常ニ必要デアル、勿論體重ノ絕對量ハ個人ニヨリテ相違アルベキハ言フ迄モナケレドモ、各個人ニ就キ、身長、體格ニ應ジテ夫々之レニ相當スベキ理想ノ體重ヲ決定シ得ル標準ヲ作ルコトハ極メテ必要ナレドモ、決シテ簡單ナル業デハナイノデアル、此方面ニ關シテ一頭地ヲ拔キタル見解ヲ以テ多クノ業績ヲ發表シ從來應用セラレタル「カロリー」法ニ變改ヲ加ヘテ「子ム」法ヲ算出シ多數ノ健康、患兒若シクハ大人ニ應用シテ正ニ榮養學上ニ一新生面ヲ開拓セラレタルハウヰーンノピルケー Pirquet ナリ氏ハ榮養狀態ノ標價ニ當リテ體重ニ標準ヲ取リタルハ從來ト異ナル所ナケレドモ、正常人ノ體重ノ標準ヲ大體其年齡ニ應ジテ坐高ヲ起點トシテ計算セリ以下聊參考ノ爲メニ同氏ノ體重測定ニ關スル主張竝ニ其測定數トヲ記載シヨウト思フ。

抑〻坐高トハ椅子ニヨレル人ノ坐面ヨリ頭ノ頂上迄ノ長サヲ示スモノニシテ素ヨリ姿勢等ニヨリ多少ノ相違アレドモ一糎位ノ誤差ニ過ギナイ、乳兒若シクハ小兒ノ如キハエプスタイン Epstein ノ考案ニナル平臥ノ位置ニテ測定スルコト板ヲ使用スルコトガ理想的ナリ、同氏ハ此坐高ト體重トノ關係ヲ胎兒ヨリ大人ニ至ル迄多數ノモノニ就キ測定シ（若シクハ他人ノ測定數ヲ利用シ）兩者ノ間ニ極メテ簡單ナル關係アルコトヲ見出セリ、卽チ體重及坐高ヲ夫々瓦、若シクハ糎ヲ以テ言ヒ表ハス時ハ筋肉發達セル大人及ビ肥レル子供ニ於テハ左ノ關係アリ坐高^3＝10×體重　坐高＝$\sqrt[3]{10\text{體重}}$ ニシテ $\frac{\sqrt[3]{10\text{體重}}}{\text{坐高}}$＝指數トス　此ノ指數ヲ一〇〇ヲ以テ言ヒ表ハシ居ルノデアル、發育セル子供ハ通常此ノ指數ハ九四ニシテ削瘦セルモノハ八一ニ達スト言ヘリ、以下聊カ、各發育期ニ應ジテ少シク立チ入リテ見ルナラバ左ノ通リデアル。

胎兒、五十四例ノ測定

八一乃至八五(八例)、八六乃至九〇(二十三例)、九一乃至九五(十六例)、九六乃至一〇〇(七例)ニシテ最モ多キハ八六乃至九五ノ間ニアリ。

初生兒、百二十八例ニ就テノ測定

平均九三・四六ニシテ男子ハ九三・一八(六十三例)女子ハ九三・七三(六十三例)デアル、而シテ初生兒ニ最モ多ク見ラルルハ九一乃至九二ノ指數ヲ來スモノニシテ九一以下ノモノハ瘦セタル子供デアリ、九二以上ハ肥レルモノヲ示ス。

哺乳兒、二十例ニ於ケル測定

健康及患兒ニ就キテ見タルニ八三乃至一〇一ノ間ヲ上下シ九二又ハ其以上ノ指數ヲ示スモノハ多クハ健康ニシテ中等度ニ肥ヘ若シクハ肥滿セルモノデアル、九一以下ノモノハ多クハ病的ニシテ且ツ瘦セテオルノデアル。

第一年ヨリ第十四年ニ至ル小兒

ピルケー氏自ラ自己ノ病室ニ於テ多數ノ小兒ニ就キテ計算セルニ八四乃至一〇二ノ間ニアリテ其大多數ノ指數ハ卽九〇乃至九六ノ間ニアリト言フテ居ルワイセンベルヒ Weissenberg ガ南露ニ於ケル測定、ウエスト West ノ北米ニ於ケル算定數モ大體九四乃至九五ノ間ニアリト言ヒ、クヴェテレー Quetelet ガ「ベルデアム」ノ子供ニ於ケル測定ヲ見ルニ初生兒ハ九二・三、ニテウヰナー兒ハ九三・四六ナリシガ第一年ニ於テ其指數ハ大ニ上昇シ九八、二トナリ、第二年ニハ九五、三ニ下ルト稱シ居ルナリ以テ大體諸家及ビ諸他方ノ所見ガ一致シ居ル樣デアル。

第十五年ヨリ第二十年ニ於ケル測定

クヴェテレーハ第六年ヨリ第十年迄ハ其指數九二、第十五年ヨリ第二十年ノモノハ九六ト稱ス、ワイセンベルヒ及ウェストハ共ニ此年齡ニ於ケルモノハ九四乃至九五ノ間ニアリト言フ卽チ筋肉及脂肪ノ發育ニヨリテ青年期ニ於テハ指數ハ稍上リオルヲ見ルトイフ。

大人ニ於ケル觀察

クヴェテレー及ワイセンベルヒハ大人ニ於ケル指數ハ大體九六乃至九八。九ノ間ニアリピルケーハ大人ノ善ク發達セル筋

肉逞シキ男子ニ於テ九〇乃至一〇三ヲ見出シ平均一〇〇ナリト稱ス。

シック Schick ニヨルニ婦人ノ瘦セタルモノハ九〇乃至九一ノ間ニ、肥ヘタルモノハ一〇七乃至一〇九ノ間ニアリト言ヒ其大多數ハ九七乃至一〇四ノ間ニテ平均ハ亦一〇〇ナリト言ヘリ、之レヲ要スルニ體重ト坐高トノ間ニ存スル指數ノ算出ニヨリテ各個人ノ榮養狀態ヲ窺ヒ知ルコトヲ得、此ノ指數一度ハ體重ノ三%、十度ハ二七%、二十度ハ四九%ニ相當スト言フ而シテ各個人ニ於テ五度ノ上下アル際初メテ意味アルモノナリト稱シ居ルノデアル。

ビルケー氏ハ坐高ト腸ノ表面積トノ關係ヲ研究シ多數實驗例竝ニ文獻等ヲ利用シテ終ニ腸ノ表面積ハ坐高ノ平方ニ等シトノ結論ニ達セリ。次デ、腸表面積卽チ食物ノ吸收面ト體重トノ關係ヲ論述シ居ルナリ卽チ $\text{坐高} = \sqrt{10\text{體重}}$ 腸表面積＝坐高 腸表面積＝$\sqrt{10\text{體重}}$ トノ關係ニ到達シタノデアル以上ニヨリテ坐高ヲ起點トシテ標準體重ヲ論ジ加フルニ之レヲ利用シテ各個人ニ何程榮養ヲ取ラシムベキヤヲ論ジ居ルノデアル、今此榮養療法ニ論及スル要ナク、吾人ハ標準體重ノ測定法ヲ知リ得バ卽チ茲ニハ充分デアルト思フ。

上記ビルケー氏考案ニヨル新榮養研究法特ニ體重ト坐高トノ關係ハ日本人ニモ常ニ應用シ得ルヤト言フコトニ關シ昨年來聊カヅヽ實驗シツヽアルノデアルガ御承知ノ通リ邦人ハ胴ノ長ハ比較的長イ爲メニ坐高ノ長ハ日歐人ニ於テ大差ナケレドモ足ガ短カイ、體重ガ少ナイ隨ツテ $\frac{\sqrt{10\text{體重}}}{\text{坐高}}$ ＝指數ノ指數計算ニ於テ常ニ稍〻小ナルコトヲ見出シ居ルノデアル故ニ日歐人デ同一身長、同一體重ノモノニ於テハ坐高ノ割合ニ相違ガアル、隨ツテ計算セル指數ハ一〇〇以下トナルモノガ非常ニ多イ、邦人ニ對シテ此指數ノ標準ヲ利用シ正常數ヲ一〇〇ヨリ何程低下セシメテ可ナルヤ今日一寸未ダ確實ノ見解ヲ有シテ居ラヌ、然ルニ近者鶴見三三博士ハ中楯幸吉氏ト共ニ興味アル見解ヲ發表セラレ新考案ヲ記載セラレ居ルヲ以テ特ニ邦人ニ關シ同氏等ノ記載ノ一二ノ點ヲ記シテ見ヨウト思フ。

鶴見氏等ノ新考案

同氏等ノ指數決定法ハ卽

$$\frac{100\sqrt{10\text{體重}}}{\frac{1}{2}\text{身長}} = \text{指數}$$

此指數ヲ應用シテ一三四七名ニ於ケル所見ニ於テハ誠ニ遺憾ナク之レヲ實地ニ應用シ得ト言フ此ノ榮養指數ニ於テハ、各年齡ヲ通ジテ一〇〇以上ヲ佳良ナル榮養指數トシ九六以下ハ不良ニ相當スト言ヘリ興味アル考案ナリト信ズル。

兎ニモ角ニモ以上ニヨリテ各個人ガ其坐高若シクハ身長ニ應ジテ有スベキ體重ノ略ボ標準量ハ之レヲ知リ得タルモノト信ズル之レヲ結核其他ノ榮養療法若シクハ諸種ノ疾患特ニ新陳代謝病等ノ體重測定ニ際シテ標準量ノ決算定ニ利用シテハ如何デアロオカト思ノデアル。

結論

以上ニヨリテ結核ノ特ニ肺結核ノ治療法中榮養療法ガ如何ニ重要ナルモノカヲ聊カ記載シテ見タノデアル。

然シ結核患者ニ榮養療法ヲ施ストモ彼等ヲ肥胖症タラシメヨト言フノ意デハナイ、又肥胖症ニ陷ラズトモ餘リ過重ノ食餌ヲ强ウルノハ亦宜敷カラズトノ理由ヲ述ベタノデアル、然ラバ適當ノ榮養療法ヲ施スニハ何ヲ標準トスベキヤト言フニ各年齡若シクハ體格ニ應ジテ標準體重ヲ目標トスルコトガ善イトノ理由ヲ述べ、標準體重測定法ニピルケー氏法及鶴見氏等ノ變法ヲ簡單ニ述ベテ見タノデアル。